94.10.20. 朝刊

第3種郵便物認可　朝日新聞

交通量増 拡幅した立田村道

並行する農道、計画

県、建設予定を再検討へ

立田村の村道拡幅が波紋を広げている。村道は、県が建設を予定している広域営農団地農道（広域農道）と並行して走る。県の財政事情は厳しく、県海部農林水産事務所は「これでは広域農道の必要性があるのか。計画を再検討する」との考えだ。村は「農道に影響を与えるとは考えていないのだが……」と戸惑いを隠せない。

村が拡幅したのは村役場から西の村道約2・5キロの区間。昨年度から事業に入り、幅を5メートルから5・5メートルに広げた。拡幅のために村が計上した今年度予算は、約2億1千万円。最近交通量が増えたため、地元から「危険だ」と改善を求める要望があった。センターラインと歩道を設け、安全性を向上させた。

一方、広域農道は、村道からわずか400メートル離れて並行して開通する予定だ。93年に決まった同村を含む尾張西南部地区の計画で、一部で既存の道路を活用しながら、八開村から飛島村までの約28・5キロを、幅約7メートルの片側1車線で結ぶ。総事業費は86億円。村内部分の広域農道の建設費に約2億円が見込まれている。同村内では、建設予定地の住民への説明はすでに終わっている。

広域農道は、県の土地改良事業の一環で、道路を整備して、大量出荷などを可能にして、生産コストの削減と活性化を目指している。事業費の50%を国、45%を県、残り5%を市町村が負担する仕組みだ。

こうした状況が生まれたのは、村には義務はないが、県に拡幅工事について連絡していなかったためだ。県が村道拡幅について正式に村に問い合わせたのは、狭い地域に2本の道を整備する必要があるのか疑問を抱いた村議が県に問い合わせたのがきっかけだった。

県海部農林水産事務所建設課は、担当職員が現地を視察した。同課は「状況が変わったので、広域農道の必要性について改めて検討する。地元の同意が必要だが、計画変更もあり得る」と言う。村道の拡幅工事が終わった後、車の流れなどを調査して対応を検討することになりそうだ。

村は「村道の拡張が広域農道の計画に影響を与えるとは考えていなかった。現時点では計画通りの建設を希望している」としている。

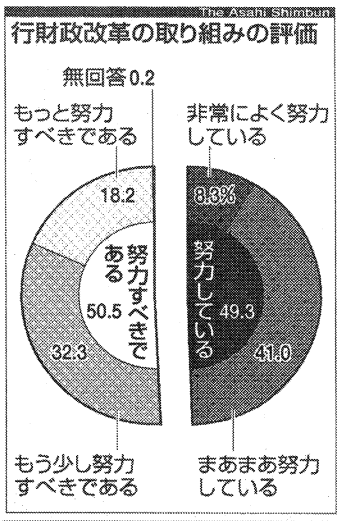
拡幅された村道。約400メートル離れて並行して広域農道が建設される計画＝立田村で

県の行革

「知らない」6割以上

県政モニター 20～30代は8割超

県の行財政改革について、6割以上の人が取り組みを知らず、半数が「さらに努力すべきだ」と考えていることが、県が実施した県政モニターアンケートの結果からわかった。若い世代ほど取り組みを知らず、評価も低い傾向があるため、モニターの意見を来年度からの県の新しい指針づくりに反映させる一方、若い世代へのPRを強化したいとしている。



県政モニターは市町村推薦の150人と一般公募で選ばれた350人の計500人。年齢や地域のバランスを考え、県民の平均的な声が聞き取れるように構成されている。

調査は今年6月にこの500人を対象に郵送方式で実施。473人から回答があり、回収率は94・6%だった。

県が行財政改革に取り組んでいることを「まったく知らなかった」は19

ロッカーに入る折り畳み自転車

世界最小サイズ

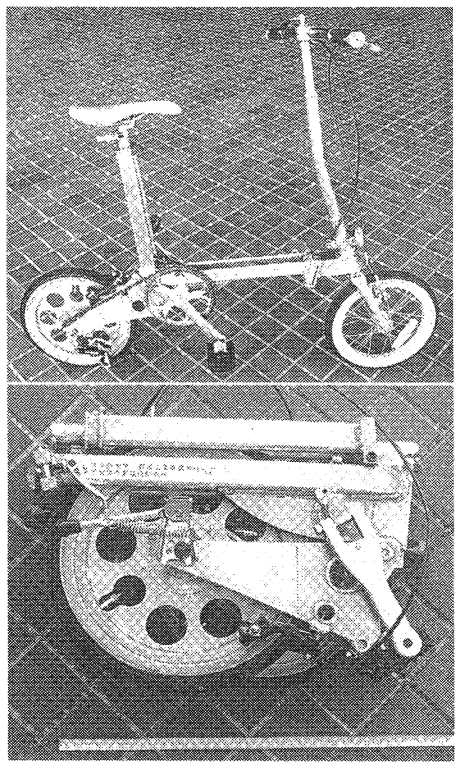
産官学で共同開発、ITS会議で公開

コインロッカーに入ってしまう、折り畳むと世界最小サイズの自転車を開発したと、県産業技術研究所（刈谷市）が発表した。工学院大（東京都）の塩田清・専任講師らとの共同研究で、実用化されれば旅先などで重宝しそうだ。名古屋市で24日まで開かれるITS世界会議の県ブースでデモ公開されている。

同研究所によると、開発した自転車はタイヤの直径が14インチ。乗車時の大きさは高さ約1メートル、長さ約1・2メートルだが、折り畳むと縦33・3センチ、横47・4センチ、厚さ25・7センチまでコンパクトになる。塩田さんが折り畳みの構造を設計、武豊町の金属加工会社「斎藤工業」（斎藤清隆社長）が製作を申し出た。同研究所も技術的に支援し、開発を進めていた。

折り畳み自転車は「二つ折り」が主流だが、塩田さんは「三つ折り」にこだわり、部品同士のすき間をできるだけ少なくする方法を研究。二つ折りの約38%まで体積を抑えた三つ折り自転車の設計に成功し、6月には特許を取得した。

自転車はコインロッカーやバッグにも収納でき、レジャーや通勤だけでなく災害時の移動手段などにも期待される。ただ、試作品は10・5キロとやや重く、商品化には軽量化が求められるという。塩田さんは「公共交通に頼りがちな高齢者の移動から、宇宙での月面探査まで幅広い応用が考えられる」と期待する。



上新開発の折り畳み自転車（乗車時）下折り畳んだ後の自転車＝いずれも県産業技術研究所提供